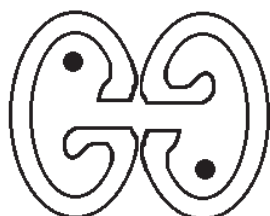


日本双生児研究学会ニュースレター



《第72号》

Newsletter of Japan Society for Twin Studies

布施晴美先生 特別追悼

2022年7月発行

目次

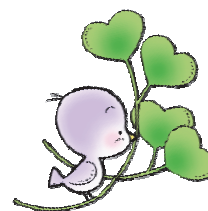
・日本双生児研究学会 学会長挨拶	2
・布施晴美先生を偲んで	3
・日本双生児研究学会 第36回学術講演会 報告	7
・第40回日本双生児研究学会夏の研修会のご案内	12
・日本双生児研究学会 第37回学術講演会のご案内	12
・論文・抄録紹介	15
・総会・幹事会報告	16
・2021年度日本双生児研究学会奨励賞受賞候補者推薦方法について	22
・『双生児研究』(Japanese Journal of Twin Studies) 投稿規程	23
・『双生児研究』(Japanese Journal of Twin Studies) 査読ガイドライン	24
・『双生児研究』(Japanese Journal of Twin Studies) 原稿執筆要領	26
・学会事務局よりお知らせ	28

編集後記

会員募集のお知らせ

入会を希望される方は郵便振替用紙に口座番号(00910-2-253840)、加入者名(日本双生児研究学会)をご記入の上、年会費(3,000円)をご送金下さい。また、通信欄に所属・所属の住所・電話番号・FAX番号・E-mail等をお書き添え下さい。

〒565-0871 大阪府吹田市山田丘1-7 大阪大学大学院医学系研究科
附属ツインリサーチセンター内 日本双生児研究学会事務局
学会ホームページアドレス <https://jsts.jp.net/>



＜日本双生児研究学会 学会長挨拶＞

大阪公立大学大学院 横山美江

日本双生児研究学会の歴史は比較的早く、1986年に双生児研究会第1回設立準備会が設置され、1987年に学会が創立されました。本学会は、当初国際双生児学会（International Society for Twin Studies: ISTS）学術集会を日本においても開催すべく、初代会長の井上英二東京大学名誉教授が中心となり設立された学会です。1992年には、日本双生児研究学会の前身である双生児研究会が事務局となり、第7回国際双生児研究会議（学術集会）が日本で無事開催されました。学会の設立から今年で35年以上が経過しています。このような歴史ある学会の第11代会長として、ご指名いただきましたことは大変光栄だと感じております。心より御礼申し上げます。

私自身が双生児研究に携わりましたきっかけを少し紹介させていただきたいと思います。博士課程に在籍していた頃、研究室の先生方が双生児研究を推進しておられ、その双生児研究の一旦を担わせていただいたことが、双生児研究に携わるきっかけとなりました。研究内容としましては、双生児研究法を用いた身体発育に関する遺伝と環境の分析を実施してまいりました。本研究は、2007年からヘルシンキ大学との共同研究を経て、現在では世界24か国との国際共同研究に発展しています。

一方、研究を開始した当時は、不妊治療により多胎出産が激増していた時代で、そのようなときに多胎児をもつお母さま方に調査させていただき、返信いただいた調査票の欄外に「多胎児の育児が非常に大変で、マンションのベランダから飛び降りようと思うことがよくあります」というメッセージが書かれているのを読み、大きな衝撃を受け、「どうぞ飛び降りないで！多胎児育児の大変さを研究として社会に提示し、少しでも多胎児家庭への支援をしなければ」と祈るような思いで多胎児家庭が抱える課題についても研究してまいりました。当時は、双子や三つ子のご家庭にはほとんど公的サービスがない状況でした。しかし、現在では、厚生労働省も多胎妊産婦への支援として、多胎ピアサポート事業や多胎妊産婦サポーター等事業も実施するなど各自治体でも支援が広がっています。

現在、日本双生児研究学会では、多胎児を養育される保護者の皆様方とも協力しつつ、学会活動を進めております。2022年1月の学術集会では、松葉大会長のご尽力のもと世界各国の双生児研究者を招聘しつつ学術集会が開催されました。今後、学会のさらなる発展のために、学会員の皆様と協力しながら学会活動を進めてまいりたいと思います。今後も、学会活動に何卒ご協力賜りますようお願い申し上げます。

＜布施晴美先生を偲んで＞

十文字学園女子大学幼児教育学科 布施晴美先生が、昨年（2021年）12月21日にご逝去されました。ふたごのお母様の立場であり、多胎支援の研究に多大な貢献をされた先生です。この場をもちまして、お悔やみ申し上げます。

4名の先生方から追悼のお言葉をいただきました。

「布施先生の思い出」

慶應義塾大学文学部 安藤寿康

布施先生と直接一緒にお仕事をさせていただいた思い出は、NHKの「すくすく子育て」のスタジオだった。ふたご子育てをテーマにするからと出演を依頼されたのだが、私の専門は行動遺伝学で、ふだん従事しているのはもっぱら「ふたごによる」研究であって、「ふたごの」「ふたごのための」研究の方は、もちろん関心はあるけれども、専門家を名乗る見識も経験もない。それで出演そのものをためらっていたところ、相方が布施先生とうかがい、それなら行動遺伝学者に徹していても大丈夫だと安心することができた。

「布施先生といれば安心」。布施先生との思い出をことばにしようとしたら、ひとえにこのことばに尽きるといって過言ではない。私が学会長を務めさせていただいていたときの幹事会でも、それから最後の、そしてもっとも密で学術的なお仕事をさせていただくこととなった「新型コロナウイルスの多胎子育て状況調査」でも、そこに布施先生がいてくださるだけで、深い安心感を覚えることができた。この感じは、布施先生を知る誰もが抱いていた感情だろうと確信することができる。

考えてみると、「日本双生児学会広し」といえども(あまり「広し」とはいえないけれど)、自らがふたごの親にして研究者でもある方は決して多くはない。それだからこそ、ふたご子育て当事者にして心理学者でもある布施先生の存在と、そこから発せられる言葉には、格別なものがあつた。それが布施先生のふたご子育て研究の専門家としての「安心感」の源であることはもちろんのことなのだが、布施先生にはその専門性以上の「何か」があつたと思う。それもまた布施先生を知る誰もが感じていたであろう、その天性の優しさと明るさである。それはあの笑顔からこぼれでる温かく包容力のある声の質感に、いまもすぐ思い出せるくらい豊かに現れている。

だから布施先生のあまりにも突然の訃報をメールで受け取ったときのあの非現実感も、今でもありありと思い出せる。それは北九州から横須賀に向かうフェリーの船上、サバティカルを利用して2ヶ月を福岡県糸島で過ごしてからの帰路だった。布施先生とは一昨年コロナ調査を学会の有志と実施しており、そのときはちょうど調査項目選定のつめの段階で、直前までZoomで頻りにミーティングをしていた最中だった。その項目の提案に最も関わってくださっていたのが布施先生ただけに、その訃報は、どう考えても「ありえない」ものだった。長距離のフェリー旅という非日常空間に襲ったその突然の非現実的な知らせに、逆にやけに奇妙に「この先、調査をどうすればいいのだろう」と冷静さをふるまおうとしていたと思う。もっともいっしょにいた家内から見ると「まさか、布施先生が亡くなった」と騒いでいたらしい。

とはいえそれでも私は学会活動やピンポイントで集中してしなければならなかった共同研究でしか、布施先生との接点はなかったわけで、先生と日常を共にされていた御家族や同僚の方々の喪失感はそれどころではなかっただろう。それは参列させていただいたお通夜の式場に掲げられていた昔からの親しい人たちに囲まれた素顔のお写真、そのいずれにも映し出された変わらぬ優しく温かい笑顔がから感じ取ることができた。

本来であれば布施先生自らに語っていただくはずだった調査報告には、肉声の代わりに、報告書の中に布施先生がご自身でお書き下さった「研究の背景」「調査の焦点」に当たる部分を、そのままできるだけ引用させていただくことで、学術的に布施先生を生前の御貢献をこの世に残し、偲ぶよすがとさせていただきます。

「布施晴美先生を偲ぶ」

金沢大学 日本多胎支援協会 志村恵

日本双生児研究学会の幹事であり、日本多胎支援協会代表理事であられた布施晴美十文字学園女子大学教授が急逝されてから、半年が過ぎようとしています。布施晴美先生は、ご自身が双子のお母さんであり、また多胎家庭支援の優れた研究者であり、さらに包容力のある優しい人柄により、本学会だけではなく、各種学会、職場、地域活動、そして何よりも多胎家庭支援活動において人々から敬愛され頼られる存在でした。改めてその存在の大きさを想うとともに、微力ながらその責務の一部を引きついたわが身の至らなさを痛感する日々です。

布施晴美先生は、2021年12月21日、その58年の生涯を突然の病により閉じられました。本学会からの参列者をも得て、12月27日に通夜、28日に葬儀がしめやかに執り行われました。先生の活動範囲の広さとそのお人柄を映じるように、実に多くの方々参列され、また、供花やメッセージが多数寄せられていました。

亡くなる直前の12月20日に、日本多胎支援協会の理事の皆さんとSBI希望財団の助成金応募のため、オンライン会議を開き、その際の深淵とした元気なお姿を思い出すと、その翌日に急逝されたことが信じられません。「ooなのよ〜!」「そうですね〜」といういつもの明るく伸びやかなお声が今でも耳の奥に聞こえます。これは先生とお付き合いのあった方々に共通する感覚なのではと思います。

本学会では、布施晴美先生は、多数の口演を出された他、2017年1月28日に十文字学園女子大学で加藤則子日先生を大会長として開催された第31回学術講演会を事務局長として運営されました。また、2020年1月11日に石川県政記念しいのき迎賓館を会場として開催された第34回学術講演会（大会長：志村）において企画され木秀一教授追悼シンポジウム「多胎家庭支援の諸相」において、多胎家庭支援の多様なあり方を当事者ファーストの視点からまとめて下さいました。

私事になりますが、布施晴美先生は、実は、3年前に亡くなった妹の聖路加国際大学での一年後輩にあたり、大学時代は同じサークル、また聖路加国際病院でも同じ小児病棟に属していたそうです。そして「シム先輩」と妹のことを呼んでいたそうです。妹の学生時代の話を知り、先生のことを本当に近く感じていました。その意味でも、たとえば2020年11月にハイブリッドで開催された日本子ども虐待防止学会第26回学術集会いしかわ金沢大会で先生が主宰された公募シンポジウム「多胎家庭の虐待未然防止について ～地域で多胎家庭を孤立させない取り組みについて考える～」において、総括をさせていただいたこと、そして厚労省の2017年度子ども・子育て支援推進調査研究事業「多胎育児家庭の虐待リスクと家庭訪問型支援の効果等に関する調査研究」に共に参画させていただいたことは大切な思い出です。

布施晴美先生の多胎家庭支援に関する優れたご研究と多胎全般にわたる深い知見、そして何よりもその本当に優しく、人々を包み込むようなお人柄を想うと、あまりにも早いご逝去が本当に残念でなりません。ご一緒させていただいたさまざまな多胎家庭支援の活動に感謝するとともに、先生とご遺族のみなさまに心から平安を祈ります。

「布施晴美先生のご逝去を悼んで」

十文字学園女子大学教育人文学部幼児教育学科 加藤則子

十文字学園女子大学教育人文学部心理学科の学科長でいらした布施晴美先生とは、同じ大学で仕事をさせていただいておりました。布施先生がご逝去されましたこと、深くお悼み申し上げます。昨年12月21日、お元気でご活躍中だった布施晴美先生が亡くなりました。突然のことに、訃報を受けた大学教職員は、なぜ、どうしてと、みな信じられない気持ちでした。心理学科の学科長をされ、さらに日本多胎支援協会の代表理事の任にも当たられていらして、ご関係者の皆様は、布施先生を失った悲しみはもとより、何もかもこなしてくださっていた中だったので、どうしていいかわからないといった、途方に暮れた思いでいらっしやっただことと思います。わたくしも全く同じ気持ちでした。

布施先生は、ご自身で双子を育てられ、また双子研究をされている大学の先生ということで、多胎支援・多胎研究の分野で大変心強い存在でいらっしやいました。十文字学園では、わたくしの10年先輩に当たります。7年前になりますが、双生児研究学会でご一緒の布施先生が赴任先の大学にいらっしやるのが大変心強かったです。赴任して2年目、日本双生児研究学会を、2017年1月学内の大教室を使って開催させていただきました。学内事情にお詳しい布施先生に、どれだけお世話になったかわかりません。お忙しい中、抜群の機動力で、あっという間に開催にこぎつけてくださいました。お礼の申しようがございません。

大学心理学科の学科長と日本多胎支援協会の代表理事を兼ねられ、多忙を極めていらっしやる中、ご無理を承知で保育士養成の教科書の編著を共同でお願いしました。学識経験と、分担執筆者を探していくうえでの人脈を考えると、布施先生以外には考えられなかったのですが、こちらも二つ返事で快く引き受けてくださいました。多胎妊娠が特定妊婦に組み込まれ、産後ケアについても多胎児の場合に特別配慮を設けるなど、国の制度が多胎支援に追い風になり始めたところで、新聞雑誌の取材も多く、さぞやお忙しいかろうと思っておりましたが、教科書のご執筆も、滞りなくお努めくださり、恐縮いたしました。また、大学主催の研修会で当方が資料の準備に大ポカをやった時も、布施先生が笑顔で迅速に対応してくださり、事なきを得たことなど、布施先生からの御恩は数え切れません。

何事にも明るく前向きで、周囲を和ませるお人柄は、皆様良くとおりです。メールなどでご多忙中のお願いを詫びると、私は嫌なことはどんどん後回しにするし、おまけに怠け者です、などとユーモアたっぷりに謙遜なさいました。いただいたお名刺はジップロックに一旦仕舞ったままです、とも。その後キッチンでジップロックを見るたび、布施先生のお人柄とご活躍を思い出します。亡くなる前日までフルにご活躍だったこともあって、なかなか実感がわかず、同僚と、「今ふとこの廊下を通られそうな気がして」とか、『私がいちばんびっくりしちゃったー』なんておっしやりそうな気がして、など冗談を言いつつ、泣いたり笑ったりしています。

ご経験やご実績、そしてお人柄と、多胎支援にとって重要な資質をすべて兼ね備えていらっしやる布施先生を失ったことは、わたくしたちにとって、とても大きな喪失であり、悲しみです。それと同時に、布施先生が築いてくださった多胎支援の礎を、これからのわたくしたちの活動の指針としてご遺志を引き継いでいかなければならないと、強く感じているところです。

謹んで布施晴美先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。 合掌

「晴れた空のように」

一般社団法人日本多胎支援協会 糸井川誠子

「あれが布施先生が好きだった富士山よ」

埼玉のスタッフの声に目を上げると武蔵野線の車窓から驚くほど大きな富士山が見えました。布施先生のご葬儀に向かう電車の中から見た富士山は、悲しいほどに晴れ渡った青空にくっきりとその姿を見せていました。大学や多胎支援に通われる電車の中で布施先生は「ここから見える富士山が好き」とおっしゃっていたそうです。思えば、この青空のような、この山のような、そして海のような方だったと、布施先生がお好きだったという富士山をぼんやりと眺めながら思っていました。海のように愛情深い先生は学生さんにも慕われていたのでしょうか。葬儀にはたくさんの学生さんが参列していました。詳しくはお話しされませんでしたでしたが、いつだったか先生は「学生もね、本当に色々な事情を抱えている子がいるの。若いのにそんな事情の中で頑張ってるんだなあと思うわ。話を聞くことぐらいしか私にはできないけど。」とおっしゃっておられたことがありました。さまざまな事情を抱えた学生さんにとって、先生は心の支えだったと思います。分け隔てなく、誰をも温かく包み込んでくださる布施先生に助けてもらった学生さんも多いのではないのでしょうか。

先生の海のように深い愛情は多胎家庭にも向けられていました。お忙しいお仕事の傍ら、地域の多胎家庭の集いにも積極的に参加されていました。山のようにどっしりと揺るぎない先生に「大丈夫よ」と言われると、私たちもホッとしたものです。たくさんの多胎ママたちが先生を慕っていたのも頷けます。先生のお話が聞きたくて、講演会や講座にも引っ張りだこだったと聞いています。また、先生は「研究者であり、多胎育児の当事者である」ことに強い使命感を持っておられました。いつも「小児看護師として赤ちゃんを何人もケアしていたから2人ぐらい何でもないと思っていたけど24時間の世話というのは、とんでもなかった。小児看護師の私でもそうだったんだから経験のないママがいきなり双子を育てるんだから、本当に大変だと思う」「私たちの研究や知見を、少しでも多胎ママが楽になる支援に繋げるのが経験者でもある自分の役割」とおっしゃっていました。その深い信念を積極的に表にあらわすようになられたのは、みつごちゃん虐待死事件からだと思います。先生は名古屋まで裁判の傍聴に来てくださって「こんなことは二度と起こらないようにしなくちゃ」と繰り返し言うておられました。そして、「虐待防止に多胎という項目を入れておくのは、私たちにしかできない。忘れられないように虐待防止学会に演題を出し続けて社会に訴えていかなくちゃ」と言うておられ、日本多胎支援協会の代表理事として多胎支援を牽引していくのだという強い意志を示されました。研究を研修プログラムという形にしたり、冊子や動画にまとめて当事者や当事者を支援する立場の専門職が利用できるようにしたり、厚労省や企業に働きかけたりと、それからの先生は精力的に動かれていました。不思議なことに、行動は精力的なのに、そのお姿はいつも、お名前の通り晴れた空のように軽やかで明るく朗らかでした。だから、一緒にやっている私たちも肩の力を抜いて楽しく活動できたのです。

双生児学会の「コロナ禍の多胎家庭実態調査」もご一緒させて頂きましたが、アンケートの設計や仮説、分析などをひらりひらりとやってのけておられました。本当に大変だったと思うのに、決して大変そうに見えない、無理を感じさせないスタイルに、いつも安心感をいただいていた。大変なところを見せないというのではなく、どんなことも「大丈夫、何とかなるわよ」と、どっしりと構えておられる方でした。

その布施先生が、もうおられないなんて、まだ信じられない気持ちです。

あまりに大きな存在を失って、この先どうしていいのかわからないというのが正直なところですが、いつまでもメソメソしては布施先生が心配されるかも知れませんね。「顔を上げて」という先生の声が聞こえるようです。布施先生のされてきたことを継いでいくのが私たちの役割だと思います。これからは、先生が残してくださった道筋を大切に、少しでも研究と多胎支援をつなぐお手伝いができたらと思っています。きっと先生はいつも「大丈夫よ」と言いながら見守ってくださっていると思います。あの晴れた空のように微笑みながら。

＜日本双生児研究学会 第36回学術講演会報告＞

大会委員長 岐阜聖徳学園大学経済情報学部 松葉敬文

2022年1月22日（土）、「ニューノーマルな社会と双子」を大会テーマに第36回学術講演会がオンラインで開催されました（開催校：岐阜聖徳学園大学）。当初はハイブリッド（対面・オンライン併用）型で開催する予定でしたが、2021年晩秋の頃より欧州を中心に感染が広がっていた新型コロナウイルス変異株が、12月に入り国内でも感染が確認されるようになったため、社会的状況を鑑みオンラインでの開催に変更となりました。急遽の変更となりましたが、多くの皆さまにご参加を頂き、盛会裏に大会を終了することが出来ました。

第36回大会では口演26件（特別招待口演1件、査読付き口演7件、一般口演7件、教育講演7件、ワークショップ4件）、シンポジウム3件および記念講演会と、例年の約2倍となる30件の研究発表や講演が行われ、質疑応答でも活発な議論が交わされました。（また今次大会では学会外の方を含む多数の方から査読審査協力を得て、双生児研究学会では初となる査読制度を導入しています。）

当日は双生児研究の世界的な第一人者である Nancy L. Segal 博士をお招きし、” Unusual Behavioral Similarities in Twins Reared Apart: Genetic Effects, Random Chance or Both?”という題目で、特別招待口演を行っていただきました。また教育講演とワークショップも設置され、教育講演では厚生労働省子ども家庭局母子保健課で現在の多胎支援の枠組み設計に携わられた小林秀幸氏による近年の政策動向についてご講演を頂いた他、多胎児が絡む医療や研究の現状について国内外の医療関係者・研究者にご登壇を賜りました。ワークショップでは国際多胎支援組織協議会（ICOMBO）議長の Monica Rankin 氏、国立成育医療センター・小澤克典医長、香川大学医学部・新田絵美子博士、TAPS 財団理事長・Stephanie Ernst 氏から各分野の先端事情について発表して頂きました。なお、リアルタイムで行われた特別招待口演を除き、時差の都合で海外演者による報告は事前録画による字幕付き動画で行われましたが、報告時間とは別に設けられた質疑応答時間には全演者がリアルタイムでご登壇されています。

記念講演会では生理心理学分野の泰斗である大平英樹先生（名古屋大学大学院情報学研究科）をお招きし、” Emergence of emotion and decision-making based on predictive coding of interoception : Contributions of genetic and environmental factors”という題目で、脳神経科学分野での遺伝と環境に関する研究状況についてご講演を頂きました。また大会テーマに関する特別シ

ンポジウム「2021 年度新型コロナ禍の多胎児子育て状況調査報告」が慶應義塾大学の安藤寿康先生・藤澤啓子先生、十文字学園女子大学の布施晴美先生を中心として計画され、双生児研究学会が行っている調査の中間報告が行われました。(布施晴美先生がご急逝されたことのお知らせに12月に接しました。謹んでお悔やみ申し上げます。学会総会において、双生児研究学会の発展にご尽力を頂いた布施晴美先生に哀悼の意を表すべく黙とうを捧げ、御冥福をお祈りしました。)

最後になりますが、例年とは異なる演題発表形式の導入により生じさせました様々な業務遅滞にも関わらず、盛会に導いて下さいました学会事務局およびニュースレター担当委員の先生方、そして大会にご参加を頂きました皆様に、厚く御礼を申し上げます。鈴木国威先生(就実大学)が大会長を務められる次回の第37回学術講演会の盛会を願っております。

以下、大会の記録を記します。

(特別招待口演)

(Peer-reviewed)

Unusual Behavioral Similarities in Twins Reared Apart : Genetic Effects, Random Chance or Both?

Nancy L. Segal, Patrick Alcantara, Katherine Garcia, Kayla Garcia, Rebecka Hahnel, Addison Linneen, Sarah Massie, Steven Nguyen, Francisca Niculae, Ana Nieto, Angela Polito, Briana Ruff, Zahra Tahmasebi

Department of Psychology and Twin Studies Center, California State University, Fullerton, California, USA

Background: A wealth of twin research shows that monozygotic (MZ) twins are more alike in virtually all measured behavioral traits, relative to dizygotic (DZ) twins. These results apply to twins both reared apart (MZA, DZA) and reared together (MZT, DZT). This recurring pattern of findings is consistent with contributions from genetic effects on intelligence, personality, height and weight, to name a few. However, the lack of perfect MZ twin resemblance indicates that environmental influences before and/or after birth also shape behavioral outcomes. A related and continually posed question remains unresolved: Are MZA twin similarities in unusual behaviors and atypical characteristics best explained with reference to genetic factors, random chance, or a combination of the two? Some insights into this complex question were provided by a psychology graduate student class project undertaken in spring 2021 at California State University, Fullerton. Prior to describing the methods, early outcomes, and future directions of this project is an overview of relevant research in selected domains of human behavioral and physical development. These summaries are needed for the purpose of providing a meaningful context to the issue under consideration.

(大会記念講演)

内受容感覚の予測符号化に基づく情動と意思決定の創発

—遺伝的・環境的要因の寄与—

大平英樹

名古屋大学大学院情報学研究科心理・認知科学専攻

心理学や神経科学における情動の理論において、身体的重要性が認識されている。内受容感覚 (Interoception) とは、身体の内部の信号を感知し恒常性を維持するための制御を意味し、情動の創発と意思決定に重要な役割を果たすと考えられてきた。近年、内受容感覚と情動、意思決定の関連を説明する理論的枠組みとして、予測符号化の原理が注目されている。予測符号化の観点では、内受容感覚を含むあらゆる知覚は、単なる受動的なボトムアップ処理ではなく、脳の内部モデルによる予測と実際の信号との比較 (予測誤差) を通じて能動的に生じると考えられている。脳は、1) 内部モデルの更新、2) 身体状態の変化、によって予測誤差を最小化し、身体の生理的システムを制御している。その際、予測誤差を減らすことに成功するとポジティブな情動状態に、予測誤差が拡大・維持されるとネガティブな情動状態に導かれると考えられる。さらに、予測誤差の減少の成功とそれに伴うポジティブな感情は報酬として働き、関連する行動や対象の価値を高めると考えられる。逆に、予測誤差の減少に失敗すると、関連する行動や対象の価値が下がる。その結果、行動や対象の選択確率が変化する。

このような理論的枠組みは、内受容感覚、情動、報酬、意思決定など、複数の重要な心理的現象を統合することが可能である。内受容感覚の予測符号化のダイナミクスを記述する計算論的モデルは、これまでに得られた神経画像研究や生理心理学的研究における実証データのパターンをうまく説明することができる。このような理論的枠組みは、精神医学や心療内科の臨床的問題にも拡張することができる。うつ病は、内受容感覚の調節がうまくいかず、その結果、慢性的な炎症を引き起こす疾患として理解できる。発達障害は、内受容感覚や外界に関する知覚の過敏さ、あるいは鈍麻を特徴とする。リスクを冒す傾向や犯罪は、リスクと不確実性のもとでの報酬の評価と意思決定のシステムの障害に根ざすと考えられている。このように、この理論的枠組みは、人間の本質の理解、意思決定の予測、さらには精神・心身疾患の新しい診断・治療法の開発に新たな光を当てるものである。

双生児研究は、こうしたモデルのダイナミクスに対する遺伝的および環境的要因の寄与について示唆を与えてくれる。例えば、ADORA2A 遺伝子多型は脳の前頭-島ネットワークにおける内受容感覚と外受容感覚の処理を調節するが、内受容感覚の精度の分散はむしろ非共有環境因子によって説明されることが示されている。また、気分障害のリスクの高い双子のペアにおいて、腹側線条体における報酬予測誤差信号の減少が報告されている。さらに、意思決定における遅延割引、リスク選好、脳の報酬系における衝動性などの個人差は、遺伝的要因によってある程度説明可能である。今後、内受容感覚、情動、意思決定のダイナミクスにおける要因や過程に関する遺伝的要因の影響について、系統的な探求が求められる。

(特別シンポジウム)

「新型コロナ禍の多胎児子育て状況」

日本双生児研究学会ではコロナ禍に突入した 2020 年、多胎支援団体の全国組織である一般社団法人日本多胎支援協会の協力のもとに、全国のふたご・みつごの養育者を対象として、新型コロナ感染のリスク下における子育て状況を把握するための web アンケート調査を実施し、新型コロナ感染防止のための最初の自粛時以前(2020 年 3 月末まで)と比較して、そのストレス状況の様相とその要因分析を試み、昨年の学術講演会で特にふたごに関する報告を行った。そしてコロナ禍が引き続いた 2021 年度の状況変化を把握するため、新たな web 調査を実施している。

本シンポジウムでは 2021 年度学会アンケートの概要、ならびに 2020 年度調査の追加報告を行う。

<話題提供>

【2021 年度学会アンケートの報告】

- ・ 2021 年度新型コロナ禍の多胎児子育て状況調査報告

安藤寿康・布施晴美・糸井川誠子・天羽千恵子・藤澤啓子・山形伸二

【2020 年度学会アンケートからの示唆】

- ・ コロナ禍のふたごの子育て・ふたごの育ち

玉木 譲・畑 美南・小島 亮介・Brough Faye・井ノ川 早笑・李 知昡・須田 遼英・藤澤啓子

- ・ コロナ禍のみつごの子育て状況

安藤寿康・布施晴美・糸井川誠子・天羽千恵子・藤澤啓子・山形伸二

<指定討論 松葉敬文>

なお本研究は慶應義塾大学文学部倫理委員会と日本多胎支援協会倫理委員会の承認を得て実施された。布施晴美先生は本研究実施のさなかに急逝されましたが、本研究への御貢献を記録にとどめるため、ここに謹んで名前を残させていただきます。

「2021 年度新型コロナ禍の多胎児子育て状況調査報告」

安藤寿康¹・布施晴美^{2,3}・糸井川誠子^{3,4}・天羽千恵子^{3,5}・藤澤啓子¹・山形伸二⁶

1 慶應義塾大学文学部 2 十文字学園女子大学教育人文学部

3 一般社団法人日本多胎支援協会 4 NPO 法人ぎふ多胎ネット

5 ひょうご多胎ネット 6 名古屋大学教育学部

昨年(2020 年)度の学会アンケート調査に引き続いて、長引く新型コロナ禍でのふたご・みつごら多胎児の子育てストレスの変化や持続の状況を把握するため、本年(2021 年)度、新たに Web によるアンケート調査を実施している。

昨年度の調査との比較を目的としているので、調査項目も昨年度の調査を基本的に引き継ぎながらも、次のような改訂を行った。

1. 調査対象年齢を中学生までに広げ、「周産期から 3 歳未満」版と「3 歳以上」版に分けた。
2. ストレス状況に関わる環境についての調査項目を新たに追加した。たとえば「周産期か 3 歳未満」版での出産に際しての状況や夫婦関係の変化などである。

3. 単胎児との比較のため、全国の認定子ども園の家庭に協力を依頼し、多胎児調査と同等の項目で調査を行った。

現時点(抄録作成時)において、特に出産時の状況についてみると、たとえば以下のような結果が見られた。

- ・ 出産に際してパートナーや家族の立会いがない場合が多く(74%)、そのうちの40%がコロナがその理由であった。
- ・ 里帰り出産したケースは約40%だが、その理由の殆どはコロナとは無関係であった。
- ・ 出産のための入院中にパートナーや家族の面会を認められなかったのは28%で、面会が面会時間や回数に特に制限が設けられていないケースが42%、制限はあるが一日おきに面会できたケースが19%だった。
- ・ 退院に際しては母親がふたご2人と退院できる場合と母親だけが退院する場合がそれぞれ約40%ずつであった。

なお本研究はドコモ市民活動団体助成事業の助成を受け、慶應義塾大学文学部倫理委員会と日本多胎支援協会倫理委員会の承認を得て実施された。

「2020年度学会アンケートから—新型コロナ禍のみつご子育て状況」

安藤寿康¹・布施晴美^{2,3}・糸井川誠子^{3,4}・天羽千恵子^{3,5}・藤澤啓子¹・山形伸二⁶

1 慶應義塾大学文学部 2 十文字学園女子大学教育人文学部

3 一般社団法人日本多胎支援協会 4 NPO 法人ぎふ多胎ネット

5 ひょうご多胎ネット 6 名古屋大学教育学部

ふたごやみつごのような多胎児の子育ては、平時においても単胎児と比べて育児負担が大きく、養育者に高いストレスがかかるが、特に新型コロナウイルス感染拡大状況にある今日、そのストレス負荷はさらに困難さを深めていると思われる。

日本双生児研究学会ではコロナ禍に突入した2020年、多胎支援団体の全国組織である一般社団法人日本多胎支援協会の協力のもとに、全国のふたご・みつごの養育者を対象として、新型コロナウイルス感染のリスク下における子育て状況を把握するためのweb調査を実施し、新型コロナウイルス感染防止のための最初の自粛時以前(2020年3月末まで)と比較して、そのストレス状況の様相とその要因分析を試み、昨年の学術講演会で特にふたごに関する報告を行った。本研究では同じく2020年度に実施した調査のうち、みつごに関して、子育てのストレス状況の変化を、ふたごと比較することを目的とする。

みつご家庭の回答は12都府県から18件あり、子どもの性別組合せは、全男児5件、全女児4件、2男児1女児6件、1男児2女児2件であった。

子どもの出生体重は、ふたご(610件)が2291.8g(SD=435.6)、みつごが1506.9g(572.4)で、みつごが有意に軽かった。

子育てのストレス度を10段階で主観的評定した平均値を自粛前後で比較すると、ふたごで5.52(SD=4.76)から6.56(2.16)、みつごで5.12(2.37)から5.59(2.15)で、みつごの方がややスト

レスの少ない傾向はあるものの有意な差は見出されなかった。

なお本研究は慶應義塾大学文学部倫理委員会と日本多胎支援協会倫理委員会の承認を得て実施された。

<第40回日本双生児研究学会夏の研修会のご案内>

主催 日本双生児研究学会

2022年7月23日(土) 13:30~15:00

Zoom オンライン開催

ZoomID は後日メーリングリストにお知らせします



テーマ「多胎妊娠の管理」

講師 大阪母子医療センター 産科 川口 晴菜 先生

<日本双生児研究学会 第37回学術講演会のご案内>

大会委員長 就実大学 鈴木国威

オンラインでの学会開催が主流となってから3年が経過しました。そろそろ対面での学会を願っている人も多いのではないかと思います。第37回目の学術講演会是对面を中心としながらも、オンラインやデジタルでの強みを活かしたいと考えております。そのため、同時配信や録画を行うべく、また持続可能性を考えて、自前の設備での配信が可能かどうかを検討しながら、準備を進めています。さらに開催場所は岡山であり、晴れの国として、過ごしやすい天候で皆様を迎えてくれると思います。是非、ご参加いただき、活発な議論が行われることを願っています。

1. 日程、開催方法、企画、大会長、事務局

1) 日程: 2023年2月4日(土) 10時00分~18時00分(予定)

2) 場所: 就実大学 S館 S101教室(詳細は下記)

3) 開催方法: 対面(現在検討中ですが、同時にzoomにて配信する予定です。また新型コロナウイルスの感染状況によってオンラインのみの実施になることもあります)。

4) 企画: 松本直子先生(岡山大学)による遺伝と文化との関係について、出ユーラシア・プロジェクトでの成果を中心とした教育講演を予定しております。また、布施晴美先生の追悼企画を予定しております。

5) 大会長兼事務局長 鈴木国威(就実大学)

【会場】就実大学(岡山県岡山市中区西川原1-6-1)

・JR 西川原・就実駅より徒歩1分

岡山駅から山陽本線、赤穂線にて東側1駅目です（岡山駅から3分）。

乗り換え案内などでは、西川原駅と省略されて表示されることもあります

- ・大学周辺にはコンビニエンスストアが1つあります。飲食店は非常に少ないです（google map や map などをご確認ください）。コンビニでのお弁当を好まない人は岡山駅にて食料を調達してください。または、岡山駅まで戻り昼食をお取りください。
- ・その他の情報は <https://www.shujitsu.ac.jp/access/> をご確認ください。

2. 参加資格および参加費

- 1) 日本双生児研究学会会員の他、非会員、学生も参加できます。
- 2) 参加費: 2,000 円（多胎家庭の方500 円（資料代として）） 当日徴収いたします。（オンラインのみで参加される方は参加費を徴収致しません）
- 3) 情報交換会: 新型コロナ感染予防のため、飲食を伴う懇親会は実施しない予定です。大会終了後、情報交換会として、全てのセッションが終了後に、会場を1時間程度解放いたします。

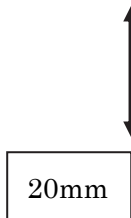
3. 演題申込の方法と抄録集掲載原稿の送付

- 1) 大会開催方法
 - ・発表者や質疑応答を希望する人は会場にてご参加ください。また zoom を用いて同時に配信する予定ですが、現在可能かどうかを確認中です
 - 同時配信を取りやめる可能性もあります。
 - 学会の当日、機材の不調などで配信が困難なこともあります。また、配信の質や動作確実性、その他オンラインに関する保証は致しません。
 - ・新型コロナウイルス感染状況が悪化した場合には、zoom によるオンラインのみに切り替わります（その場合には、12 月から1月ごろに通知致します。）。
- 2) 演題申込
 - ・学術講演会の発表を希望される方は、演題名・発表者名・全員の所属先・発表要旨(600～1000 字程度)を A4 用紙 1 枚にまとめ、PDF 形式にし、E メールに添付し、お問い合わせ先のアドレス（下記）に送信してください。この要旨原稿は、原則としてそのまま抄録集の印刷用原稿として用います。
 - ・添付ファイル名は、”JSTS37_あなたの姓名.pdf” (例: ”JSTS37_suzukikunitake.pdf”)としてください。
 - ・メールの件名は、添付ファイルと同様にしてください(例: ”JSTS37_suzukikunitake”)。
 - ・メールの本体に下記の内容を示してください
 - 発表の同時配信が可能かどうかを選択してください
 - 発表を録画して良いかどうかを選択してください
- 3) 演題締め切り: 2022 年 11 月 20 日（日）

4. お問い合わせ先

メールアドレス : kuni-suzuki+souseiji@shujitsu.ac.jp (鈴木国威)

(作成例) 表題 (文字サイズは 14 ポイント)



双生児 花子¹・双生児 太郎² (文字サイズは 10.5 ポイント)

¹△△△大学・²○○○会 (文字サイズは 9 ポイント)

(一行あける)

※本文はここから記入

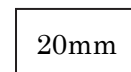
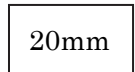
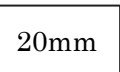
用紙は、上下 20mm、左右 20mm の余白をとる。

本文の文字サイズは 10.5 ポイント

和文フォントは明朝体で全角、英文およびアラビア数字は半角 としてください。

可能であれば I 目的・II 方法・III 結果・IV 考察・V 結論別にまとめてください。ただし、I～V のような項目分けが難しければ、それ以外でも可。

カラー印刷は不可とします。



< 論文・抄録紹介 >

「新型コロナ禍の多胎児子育て状況調査」

安藤寿康¹・(布施晴美^{2,3})⁷・糸井川誠子^{3,4}・天羽千恵子^{3,5}・藤澤啓子¹・山形伸二⁶

1 慶應義塾大学文学部 2 十文字学園女子大学教育人文学部

3 一般社団法人日本多胎支援協会 4 NPO 法人ぎふ多胎ネット 5 ひょうご多胎ネット 6 名古屋大学教育学部 7 布施晴美は本活動実施中の2021年12月21日に他界された

※本研究の報告書は<https://www.mcfund.or.jp/news/2022/001228.html> に掲載されています。

本調査研究は長引く新型コロナ(covid 19)感染症による社会的状況の変化がもたらしたさまざまなリスクが多胎児の子育てにどのような影響をも及ぼしたかを明らかにするため、ドコモ市民生活活動助成金を得て、全国の乳幼児期から小学校就学前までのふたごの養育者を対象とし、2021年12月から2022年1月にかけて、親の妊娠・出産・子育て状況と子どもの行動を、単胎児ならびにコロナ以前のふたごと比較できる形で、web調査によって把握した。

有効回答数は、ふたご155家庭、単胎児51家庭だった。ふたごは北海道から沖縄までに渡るものの、多くは岐阜に偏り、四国からの回答はなかった。また単胎児は協力を依頼した認定子ども園の所在地である青森県に偏っていた。

本調査の結果を以下の3点に要約する。

1. コロナ禍における妊娠期のトラブル上昇やサポート機会の減少、出産後の面会機会の減少は、特に多胎であることを考えると、身体的(eg.未熟なままでの退院、授乳機会の減少)、心理的(eg.個性の違いをふまえた育児)・社会的問題(eg.社会サポートへの連結)を増大させ、子育てリスクを深刻化・長期化させる懸念が高まる。
2. コロナ禍後に出産した母親のストレス度はほぼ飽和状態であると思われる。ただしそのストレス度は母子の成長とともに低減する傾向がある。またふたごの親と単胎児の親のストレス度の差は予想したほど大きくはない。
3. コロナ禍によって、夫婦関係もふたごきょうだい関係も確実に変化している。ただしその変化は必ずしも悪化したのではなく、むしろ家族関係を緊密なものにしている(eg.けんかも増えるが助け合いも増える)ことがうかがえる。

これらをふまえて、本調査から得られる示唆と問題点は以下ようになる。

1. ふたご家庭は単胎児家庭よりも経済的負担感も高いことが、これまでも、またこのコロナ禍の調査でも示されている。それに加えて、コロナ禍による医療的・社会的サポート機会の減少が、多胎児育児の困難さを高めている。多胎であることを考慮した諸状況の改善(eg.面会回数・時間を子どもの数に応じて2倍にするなど)のための支援を行政・医療・コミュニティ等に働きかける必要がある。
2. 親のストレス度は、ふたごのほうがやや高い傾向にあるものの、その差は著しいものではなかった。このことから、本調査で示された親のストレス状況に関連するさまざまな知見は、単胎児の親に対しても同じように適用されうる普遍的・一般的な知見である可能性がある。

3. ふたごは単胎児と比較して、家庭の中ですでに「社会的」な関係を築きやすい(eg. けんかもするが助け合いもする)。自由コメント(付録 6)からは、日常の格闘の末に、ふたごの育児を楽しみ前向きに捉えようとする姿が浮かび上がっていた。
4. 調査項目が多く、調査疲れも見受けられ、そのために協力が十分に得られず、回答数が予定を大幅に下回ったことが大きな問題点として残った。

<日本双生児研究学会 総会・幹事会報告>

【日本双生児研究学会 総会 議事録】

2022 年 1 月 21 日 Web 開催

総会に先立ち、先日逝去された布施晴美先生を偲ぶ時間が設けられた

<報告事項>

1. 2021 年度事業報告

- 1) 第 36 回学術講演会の現状について松葉大会長より、第 35 回学術講演会（2021 年 1 月 23 日 Web 開催）について安藤大会長より報告があった
- 2) ニュースレターの発行（第 70号、第 71号）について福島編集委員より報告があった
- 3) 会員状況について事務局 渡邊幹事より報告があった
- 4) 研究会について実施しなかった旨、志村会長より報告があった。
- 5) 奨励賞について、応募者がなかった旨、横山幹事より報告があった
- 6) 学会誌について、安藤編集委員長より準備状況の報告があった

2. 2021 年度決算報告（別紙）

事務局 渡邊幹事より報告があった

3. 2021 年度監査報告（別紙）

落合監事より監査報告があった

<審議事項>

1. 次期会長について

志村会長より、横山幹事を次期会長とする提案があり、承認された

2. 2022 年度事業案について

1) 第 37 回学術講演会の開催

志村会長より、第 37 回学術講演会を就実大学の鈴木先生が 2023 年 2 月 4 日（土）に開催することとする提案があり、承認された

2) ニュースレターの発行

福島幹事より、第 72 号、第 73 号のニュースレター発行について説明があり、布施先生の追悼特別号としての発行提案があり、承認された

3) 研究会について

志村会長より、研究会の開催を Web ベースを含めて検討する提案があり、横山次期会長が検討

することとなった。

4) 奨励賞について

横山幹事より、奨励賞の公募について例年通りとする提案があり、幹事以外にも広く推薦を依頼する方向で検討することとなった。

5) 学会誌について

志村会長、安藤編集委員長より学会誌の編集計画について説明があり、投稿規定や査読ガイドライン等について一任とした。

3. 2022 年度予算案について (別紙)

事務局 渡邊幹事より予算案の提案があり、原案に学会誌編集費用50000円の支出計画を追加して承認された

4. 規約の改正について (別紙)

事務局 渡邊幹事より会長の任期 (2年) と幹事の任期 (3年) を整合させるため、双方とも任期を3年とし、次回改選を2022年末とするための規約改正について提案があり、承認された。本日選出された横山次期会長については任期は現幹事と同様に2022年末までとした。

【日本双生児研究学会 幹事会 議事録】

2022 年 1 月 21 日 Web 開催

出席者

幹事：安藤寿康、糸井川誠子、加藤則子、志村恵 (会長) 菅原ますみ、福島昌子、本多智佳、横山美江、渡邊幹夫 計 9 名

監事：落合世津子、松葉敬文、計2 名

<報告事項>

1. 2021 年度事業報告

- 1) 第 36 回学術講演会の現状について松葉大会長より、第 35 回学術講演会 (2021 年 1 月 23 日 Web 開催) について安藤大会長より報告があった。
- 2) ニュースレターの発行 (第 70号、第 71号) について福島編集委員より報告があった。
- 3) 会員状況について事務局 渡邊幹事より報告があった。
- 4) 研究会について実施しなかった旨、志村会長より報告があった。
- 5) 奨励賞について、応募者がなかった旨、横山幹事より報告があった。
- 6) 学会誌について、安藤編集委員長より準備状況の報告があった。

2. 2021 年度決算報告 (別紙)

事務局 渡邊幹事より報告があった。

3. 2021 年度監査報告 (別紙)

落合監事より監査報告があった。

<審議事項>

1. 次期会長について

志村会長より、横山幹事を次期会長とする提案があり、承認された。

2. 2022年度事業案について

1) 第37回学術講演会の開催

志村会長より、第37回学術講演会を就実大学の鈴木先生が2023年2月4日(土)に開催することとする提案があり、承認された。

2) ニュースレターの発行

福島幹事より、第72号、第73号のニュースレター発行について説明があり、布施先生の追悼特別号としての発行提案があり、承認された。

3) 研究会について

志村会長より、研究会の開催をWebベースを含めて検討する提案があり、横山次期会長が検討することとなった。

4) 奨励賞について

横山幹事より、奨励賞の公募について例年通りとする提案があり、幹事以外にも広く推薦を依頼する方向で検討することとなった。

5) 学会誌について

志村会長、安藤編集委員長より学会誌の編集計画について説明があり、投稿規定や査読ガイドライン等について一任とした。(別紙)

3. 2022年度予算案について(別紙)

事務局 渡邊幹事より予算案の提案があり、原案に学会誌編集費用50000円の支出計画を追加して承認された

4. 規約の改正について(別紙)

事務局 渡邊幹事より会長の任期(2年)と幹事の任期(3年)を整合させるため、双方とも任期を3年とし、次回改選を2022年末とするための規約改正について提案があり、承認された。本日選出された横山次期会長については任期は現幹事と同様に2022年末までとした。

5. 会員移動について

事務局 渡邊幹事より会費を長期未納(3年)している会員1名について、現況のままであれば規約に従い退会とすることの提案があり、承認された。

6. 総会について(志村)

志村会長より本日の総会議案について説明があり、原案どおりで承認された。

7. 第38回学術講演会について

志村会長より、2024年1月に予定されている学術講演会の担当候補について適任者の推薦を求める発言があった。審議の結果、候補者の決定には至らず、継続審議とした。

8. 選挙管理委員会について

志村会長より、役員選挙の申し合わせに曖昧な部分があることから、おつて幹事会で改訂する提案があり、承認された。

日本双生児研究学会 令和4年(2022.1.1~2022.12.31)会計予算案

収入		支出	
前年繰越	1,313,857	ニュースレター印刷費(71,72,73号)	100,000
会費収入		ニュースレター郵送費(71,72,73号)	50,000
73人(112*0.65) * ¥3,000	219,000	ニュースレター編集費(R3,4年)	45,000
過年度会費20人* ¥3,000	60,000	学会誌編集費	50,000
利子	10	研究会講演者謝金	20,000
		研究会講演者交通費	30,000
		研究会会場使用費	5,000
		学術講演会援助費	100,000
		会議費(幹事会)	10,000
		奨励賞関連費	55,000
		ホームページ関連費	35,000
		事務局人件費(5,000/月)	60,000
		消耗品費	5,000
		次年繰越金	1,027,867
収入合計	1,592,867	支出合計	1,592,867

日本双生児研究学会 令和3年(2021.1.1~2021.12.31)会計収支報告

収入		支出	
前年繰越	1,186,815	ニュースレター印刷費(70号)	12,600
会費収入		ニュースレター郵送費(69,70号)	31,570
平成30年度年会費(3)	9,000	ニュースレター編集代(令和3年分福島先生未)	15,165
令和元年度年会費(11)	33,000	幹事会費用	740
令和2年度年会費(26)	78,000	ホームページ関連費	28,101
令和3年度年会費(97)	291,000	第36回学術講演会援助費	100,440
令和4年度年会費(3)	9,000	事務局人件費	60,000
令和5年度年会費(1)	3,000	消耗品費	1,662
令和6年度年会費(1)	3,000	奨励賞費	51,690
寄付金	3,000	ドコモ市民活動団体助成金振替	500,000
ドコモ市民活動団体助成金	500,000		
利子	10		
		次年繰越金	1,313,857
収入合計	2,115,825	支出合計	2,115,825

以上 相違ありません。

令和4年 / 月 / 日

監査 落合 世津子 印

監査 松葉 敬文 印

2022年2月26日(土)午後5時から Web 開催

出席者：安藤寿康、糸井川誠子、加藤則子、志村恵、菅原ますみ、横山美江（敬称略）

第37回学術講演会大会長：鈴木（敬称略）

欠席者：早川和生、広瀬英子、福島昌子、本多智佳、渡邊幹夫（敬称略）

<審議事項>

1. 2022年委員会構成について

資料に基づき説明があり、承認された。なお、書記については、会長の研究室スタッフが書記を担うこととなり、学会から謝金を支払うこととなった。

2. 第 37 回学術講演会の現状

1) 布施晴美先生追悼事業の有無について

鈴木大会長より、学会の準備状況の報告がなされた。故布施晴美先生追悼行事が次回学会で計画されることとなった。

3. 幹事選挙施行規則（第 8 条・第 10 条関連）（案）について

資料に基づき説明があり、幹事選挙施行規則（第 8 条・第 10 条関連）が承認された。

4. 選挙管理委員の委嘱について

資料に基づき説明があり、落合世津子（多胎支援協会）、池邊一典（阪大歯学部）、高橋雄介（京大）の 3 名が推薦され、承認された。

5. 日本双生児研究学会慶弔申し合わせ（案）について

資料に基づき説明があり、日本双生児研究学会慶弔申し合わせについて承認された。

6. 研究会について

研究会に関する説明があり、承認された。

1) 講師：川口晴菜先生（大阪府母子医療センター）

2) テーマ：多胎妊娠・出産の留意点（仮）

3) 日時：7 月 23 日午後 1 時 30 分から 3 時

4) 方法：zoom による

7. ニュースレターの発行

ニュースレター第 72 号が 7 月、第 73 号が 12 月に発行が予定され、故布施先生の追悼原稿を掲載予定であること、および原稿依頼については改めて関係幹事に連絡がある旨が報告された。

8. 学会誌について

安藤委員長より、学会誌の発刊に向けての準備状況について報告された。

9. 奨励賞審査委員会について

菅原委員長より、奨励賞について報告がなされた。

10. その他

2024 年の第 38 回学術講演会大会長について、次回幹事会で検討する必要がある、各幹事で候補者について検討していただくよう依頼があった。

（補足）

2022 年日本双生児研究学会委員会構成（敬称略）

幹事：安藤寿康、糸井川誠子、加藤則子、志村恵、菅原ますみ、早川和生、廣瀬英子、
福島昌子、本多智佳、横山美江、渡邊幹夫 計 11 名

事務局：渡邊幹夫

ニュースレター編集委員会：福島昌子、廣瀬英子

研究会：安藤寿康、横山美江

奨励賞審査委員会：菅原ますみ（委員長）、志村恵、福島昌子、廣瀬英子

学会誌編集委員会：安藤寿康（編集委員長）乾富士男、加藤則子、菅原ますみ、松葉敬文、
横山美江、他交渉中

書記：会長の研究室スタッフ

(2) 幹事選挙施行規則 (第 8 条・第 10 条関連)

1. 選挙に関する事務は、選挙管理委員会が管理する。
2. 選挙管理委員は、会員の中から幹事会が 3 名を推薦し、会長が委嘱する。
3. 選挙人および被選挙人は、投票年・投票月の 2 ヶ月前に会員である者に限る。
4. 名誉会員は、被選挙人から除く。
5. 選挙は、5 名連記の無記名の郵送投票とする。
6. 選挙の日程および投票の形式は、選挙管理委員会が会長の承諾を得て決定する。
7. 開票は、投票締切日から 1 週間以内に選挙管理委員会が行い、得票数上位から順に幹事選出者を決定する。
8. 幹事の数 は 10 名とし、開票時に会長は別に若干名の幹事を推薦することができる。
9. 選挙管理委員会は、全ての幹事選出の結果を会長に報告し、選挙に関する疑義がなければ解散する。

本規約は平成 7 年(1995)1 月 21 日より実施する。

平成 7 年に限り、新規約による業務は 7 月 24 日より開始する。

付記

本規約は平成 16 年(2004)1 月 24 日より実施する。

本規約は令和 4 年(2022)2 月 26 日より実施する。

(3)事務局 (第 3 条関連)

平成 31 年 (2019 年) 4 月 1 日より事務局を大阪府吹田市山田丘 1 - 7 大阪大学大学院医学系研究科附属ツインリサーチセンターにおく。

日本双生児研究学会慶弔申し合わせ

本学会は、学会活動に多大な貢献をした会員の弔事に際し、学会名で弔慰を表すため以下のとおり慶弔に関する基準を定める。ただし、適用についてはご遺族の意向を尊重する。

- 1) 現役員については、生花および弔電を贈る。またニュースレターに追悼記事を載せる。
- 2) 名誉会員については、生花および弔電を贈る。また、ニュースレターに追悼記事を載せる。
- 3) 現一般会員については、弔電を送る。
- 4) 弔電を送る場合は 5,000 円を上限として当学会が支出し、会長の名をもってこれを送る。また、生花を贈る場合は 20,000 円を上限として当学会が支出し、会長の名をもってこれを贈る。
- 5) 慶弔に関する情報及び実務は、原則として会長に集約する。
- 6) 「日本双生児研究学会慶弔申し合わせ」に関する必要事項は幹事会が定める。

日本双生児研究学会幹事会

2022 年 2 月 26 日制定・施行。

＜2022年度日本双生児研究学会奨励賞授賞候補者推薦方法について＞

2022年度日本双生児研究学会奨励賞授賞候補者がありましたら、2022年9月末日までに御推薦ください。

日本双生児研究学会 奨励賞規程

第1条 日本双生児研究学会奨励賞候補者（以下候補者）の推薦基準は、以下の要件を満たした者とする。

- 2 本学会会員のうち、我が国の双生児研究の領域における学問水準の飛躍的向上を図ることに貢献することが期待される者。
- 3 双生児研究に関する独創的研究で、かつ将来の発展を期待しうる研究業績を有する者、研究業績は、国内外の学術雑誌に掲載されているものとする（受理されていても未公開のものは含まない）。
- 4 日本双生児研究学会の会員で、原則として50歳未満である者。

第2条 候補者の推薦は、原則として幹事が推薦し、推薦できる人数は1年につき1名とするが、自薦も可とする。

- 2 推薦者（自薦の場合は立候補者）は、候補者に関する下記の書類（論文別刷以外の書類はA4版の大きさの用紙に横書きに記載したものとする）各4部を9月末日までに日本双生児研究学会事務局に提出する。
 - 1) 候補者の氏名、所属、所属先住所、略歴、関連論文目録
 - 2) 業績の概要（A4版用紙1枚程度におさめること）
 - 3) 選考対象となる研究業績に係わる論文の別刷

第3条 奨励賞は、下記の要領により決定する。

- 2 候補者の選考は、推薦基準により選考委員会が行う。
- 3 選考委員会の構成は、幹事4名とする。なお、推薦者および立候補者となった幹事は選考委員になることはできない。
- 4 選考委員長は選考委員の互選とする。
- 5 選考委員長は、選考結果を幹事会に報告し、11月末日までに承認を得て受賞者を決定する。

第4条 受賞者は、受賞年度の日本双生児研究学会総会において、会長より賞状と副賞が授与され、受賞記念講演をおこなうこととする。

第5条 奨励賞に関する事務局は、日本双生児研究学会事務局とする。

附則

この規程は、令和2年1月12日から施行する。

『双生児研究』（Japanese Journal of Twin Studies）投稿規程

承認 2022 年 1 月

第 1 条 投稿内容は広く多胎に関するものとし、投稿者の資格は問わない。

第 2 条 投稿原稿は未発表原稿に限る。

第 3 条 原稿は和文ないしは英文とする。

第 4 条 原稿の種別は原著、総説、研究報告、資料、その他とする。原稿の区分は投稿者が行うが、『双生児研究』編集委員会（以下、編集委員会という。）が変更を求めることがある。

原著（Original Article）：独創性がある内容、あるいは新しい価値ある事実を含むもので、研究として意義が認められるもの。かつ論旨が明確であり、研究目的、方法、結果、考察など、論文としての形式が整っているもの。

総説（Review Article）：ある特定のテーマに関連した研究論文の総括・評価・解説などの知見を、1 つまたはそれ以上の学問分野から幅広く概説し、考察したもの。

研究報告（Research Report）：内容的に原著に及ばないが、論文としての形式が整っており、研究の方向性が示され、価値が認められるもの。

資料（Note）：上記の分類に該当しないが、研究論文として記録にとどめる価値のあるもの。

その他：上記の分類に該当しない委員会活動報告等で、編集委員会が適当と認めたもの。

第 5 条 人および動物を対象とする研究の場合、倫理的に配慮されるものとし、倫理審査を受け、承認を得たことを論文中に記載する。

第 6 条 当該研究の遂行や論文作成において、利益相反となるような経済的支援を受けた場合には、その旨を論文末に記載する。

第 7 条 原稿の採否は次のように行う。

1) 査読を経て編集委員会が原稿の採否を決定する。

2) 編集委員会の判定により、投稿者に変更の修正および論文種類の変更を求めることがある。

論文種類の最終決定は編集委員会で行う。

第 8 条 本雑誌に掲載される論文の著作権は、日本双生児研究学会と著作者の両者に帰属する。

2 論文の内容についての第一義的責任は、その著作者自身が負うものとする。

3 著作者は自らの著作物を公衆送信、複製、翻訳するなどの形で利用することができる。ただし、出典を明記すること。

第 9 条 掲載論文は、原則としてすべて学会ホームページ及び J-STAGE を通じて公表する。

第 10 条 掲載料は実費相当とし、別に定める。

第 11 条 具体的な執筆要領は別に定める。

第 12 条 投稿は随時受け付けるが、原稿提出先は次のとおりである。

『双生児研究』編集委員会

〒108-8345 東京都港区三田 2-15-45

慶應義塾大学文学部 安藤寿康 気付

jstsjournal@googlegroups.com

附則

1. この規程は、2022年1月から施行する。(予定)
2. この規程の改廃は、編集委員会の議を経て、幹事会で行う。

『双生児研究』(Japanese Journal of Twin Studies) 査読ガイドライン

承認 2022年1月

1. 査読の対象

『双生児研究』(Japanese Journal of Twin Studies)投稿規程」および『双生児研究』(Japanese Journal of Twin Studies)原稿執筆要領」に準じて作成され、投稿された原稿を査読対象とする。

2. 査読者の選定

投稿された原稿のそれぞれについて、編集委員会は、査読者を原則として2名選定する。ただし、原著を希望する原稿については、論文の内容によって第三者による査読が必要と編集委員会が判断した場合は、査読者のうち1名を学外者に依頼するものとする。

3. 査読者の役割

- 1) 選定された査読者は、査読ガイドラインに沿って、投稿原稿が『双生児研究』投稿規程」に定義された「論文の種類」のそれぞれの趣旨に合致しているかを判定する。論文内容に関する責任は投稿者にあるとの考えに立ち、論文全体として掲載に値するか否かを判断する。
- 2) 査読者は、投稿原稿の内容について、①掲載可:修正の必要なし、②掲載可:修正後再査読必要なし、③修正後再査読、④掲載不可、に判定する。修正の必要があると判断した場合、その理由及びコメントを明記する。
- 3) 論文の内容(データやアイデア、題名を含む)、及び査読したことや査読結果について他言しない。
- 4) 査読の際、投稿論文の取り扱いには、十分注意し、他の教員の目の触れることのないよう保管する。

4. 査読上の留意点

- 1) 初回査読で問題点のすべてを指摘し、再査読以降では新たな観点での指摘は行わない。ただし、再提出された論文が大幅に修正されている場合は、この限りではない。
- 2) 教育的配慮を含めて、できる限り建設的な査読を行う。
- 3) 論文等の種類は以下のとおりである。

論文の種類は、原著、総説、研究報告、資料、その他とする。原稿の区分は投稿者が行うが、編集委員会が変更を求めることがある。

原著 (Original Article) : 独創性がある内容、あるいは新しい価値ある事実を含むもので、研究として意義が認められるもの。かつ論旨が明確であり、研究目的、方法、結果、考察など、論文としての形式が整っているもの。

総説 (Review Article) : ある特定のテーマに関連した研究論文の総括・評価・解説などの知見を、1つまたはそれ以上の学問分野から幅広く概説し、考察したもの。

研究報告 (Research Report) : 内容的に原著に及ばないが、論文としての形式が整っており、研究の方向性が示され、価値が認められるもの。

資料 (Note) : 上記の分類に該当しないが、研究論文として記録にとどめる価値のあるもの。

その他 : 上記の分類に該当しない委員会活動報告等で、編集委員会が適当と認めたもの。

- 4) 「研究報告」「資料」については、原著よりも独創性、論理構成についての審査基準を緩和し、研究方法や結果の記載の適切性や研究の発展性などを中心に査読する。
- 5) 論文の内容が、査読者自身の意見と一致しない、自分の研究と競合する、あるいは相反するなどの理由によって、不採用としない。
5. 査読結果の報告及び修正の依頼
編集委員会は査読者のコメントを添付し、投稿者に原稿の修正を求めることができる。
なお、修正・改稿は2回をもって終了する。指定した期日を超える場合は掲載しない。
6. 査読結果に基づく掲載可否の判定
編集委員会は査読者から提出された「査読結果」及び「修正原稿確認への回答」に基づいて、以下に示す手順により論文査読の最終判定を行う。
 - a. 2名の査読者が掲載可の判定をしている場合は、掲載可と判定する。
 - b. 2名の査読者が最終的に掲載不可の判定をしている場合は、掲載不可と判定する。
 - c. 2名の査読者による判定結果が掲載可と掲載不可の場合は、編集委員会が第3の査読者に査読を依頼する。
 - d. 2名の査読者の判定そのものは掲載可であるが、両者の論文種類の判定結果が分かれた場合には、編集委員会で論文種類についての最終判定を行う。編集委員会が必要と判断した場合、第3の査読者に意見を求めることができる。
7. 査読結果の取扱い
査読結果については、査読コメント（別紙を含む）を添えて（ただし、査読者は非公開）、所定の様式（査読結果通知書）により投稿者に通知する。
掲載不可となった論文については、投稿者が今後の論文投稿へ資することができるように、返却原稿・査読者のコメント等を合わせた資料とともに、委員会の審議結果を投稿者へ通知する。
8. 倫理的配慮
『双生児研究』への掲載は、人および動物を対象とする研究の場合、倫理的に配慮されるものとし、倫理審査を受け、承認を得たことを論文中に記載する。各領域及び各研究手法等によって具体的な議論点に違いがあるため、査読においては当該領域の倫理規範も参考にした上で、倫理的な配慮がされているか確認する。
9. その他
編集委員が投稿者(共同執筆を含む)の場合は、必要に応じて編集作業から除外する。

附則

この要領は、2022年1月から施行する。

『双生児研究』(Japanese Journal of Twin Studies) 原稿執筆要領

承認 2022年1月

1. 原稿の構成

- (1) 論文1編の文字数は図表と文献を含め以下とする。

原著 16,000字以内、英語 8,000字

総説 20,000字以内、英語 10,000字

研究報告 16,000字以内、英語 8,000字

資料 12,000字以内、英語 6,000字

その他 10,000字以内、英語 5,000字

図表はその大きさを以下の文字数に換算する。

1/4 ページ 500字、1/2 ページ 1,000字、1 ページ 2,000字

なお、要旨は原稿の制限枚数には含めない。

- (2) 和文・英文原稿ともに A4 版紙 40 字×30 行 (1200 字) 横書きとする。
- (3) 原稿には表紙を付し、上半分には、表題、英文表題、著者名 (ローマ字とも)、所属を記入する。下半分には、原稿の種類、原稿の枚数 (表紙、要旨を除く)、図・表・写真の枚数、キーワード (日本語・英語でそれぞれ 5 語以内)、執筆責任者の氏名と連絡先を記入記載する。ただし、本文中に謝辞などを記さない。
- (4) 原著と研究報告、および資料の論文は、和文の要旨 (400 字以内) および英文の要旨 (250 語以内) をつける。英語論文の場合は英文の要旨のみ。
- (5) 図、表等については図 1、表 1、等の番号を付け、1 枚の用紙に 1 つとし、本文のうしろに一括してつける。また、挿入希望位置は原稿右の余白に書き入れる。図、表等についてはそのまま印刷可能なものとする。ただし、カラーは不可とする。

2. 原稿の表記 (英文の場合は、"Twin Research and Human Genetics" の投稿規程 (Instruction for authors) に拠る :

<https://www.cambridge.org/core/journals/twin-research-and-human-genetics/information/instructions-contributors#:~:text=Twin%20Research%20and%20Human%20Genetics%20is%20the%20official,with%20a%20special%20emphasis%20on%20multiple%20birth%20research>

- (1) 外来語はカタカナで、また外国人名、日本語になりきっていない学術用語は原語のまま表記する。
- (2) 章、節、項などをもうける場合は、以下の符号を使用する。
- I. II. III. . . . (全角)
1. 2. 3. . . . (半角)
- 1) 2) 3) . . . (半角)
- (1)(2)(3) . . . (半角)
- ①②③ . . .

3. 文献記載の様式

- (1) 引用文献は本文中に著者名、発行年次を括弧表示する。

例 (大阪ら, 1999)

著者名を本文中で記述した場合は、その直後に発行年次を括弧表示する。

例 ; 大阪ら (1999) が述べたように……,

- (2) 文献の一覧は、末尾に著者名のアルファベット順に一括して列記する。但し、著者名は 3 名までを明記し、それ以上は「・・他」あるいは「・・et al.」とする。

- (3) 雑誌名は略記しない。

- (4) 記載方法

ア.書籍の場合

著者名 (西暦発行年) : 論文の表題, 編者名, 書名 (版数), 発行所, 発行地, 頁一頁.

[例]Osaka I.(1997):Evaluating health……,Crafter H.(ed),Health promotion……(2nd),
World Company, London, 228-261.

大阪市子 (1995) : 一般病棟での……, 横○隆○, 岩○重○, 品○長○編, 院内感染
を……, 看護……社, 大阪, 109-114.

イ.雑誌の場合

著者名 (西暦発行年) : 論文の表題, 掲載雑誌名, 巻または (号), 頁一頁.

[例] Adams.S. C. , Elliot L. , Green N. , et al. (1999):Preparing……, Journal of……,
38(5), 228-234.

小○浩○, 小○操○, 鈴○美○, 他 (1996) : 糖尿病患者の……, 看○研○, 29(5),
386-398.

ウ.翻訳本の場合

原著者名 (原書の西暦発行年) / 翻訳者名 (翻訳書の西暦発行年) : 翻訳書の書名 (版数),
出版社名, 発行地.

[例] Polit D.F., Hungler B.P.(1987) / 近藤潤子監訳(1994) : 看護研究—原理と方法,
医学書院, 東京.

- エ.同一著者、同一発行年の文献を引用する場合は、発行年に続けて a, b, …とアルファベットを付して区別する。

[例]大阪市子 (1999a) : ……

大阪市子 (1999b) : ……

- オ.同一著者の文献が複数ある場合は、発行年の古いものから記載する。

- カ.電子文献から引用する場合は、サイトの設置者名 (発行年) : タイトル, アドレス, ア
クセスした年月を記載する。

[例]厚生労働省(2003.6) : 厚生労働省統計表データベースシステム要覧,
<http://www.dbtk.mhlw.go.jp/toukei/youran/index.html>, 2004.6.16.

Walker J.(1996): APA-style citations of electronic sources.

〈<http://www.cas.usf.edu/english/walker/apa.html>〉,2003,10,15.

4. 原稿提出方法

- (1) 投稿者は、Word 形式で保存した電子ファイルを編集委員会に提出する（複写の表紙の記載については上記を参照のこと）。
- (2) 論文が採択となった場合は、完成原稿を Word 形式で保存した電子ファイルを編集委員会に提出する。

附則

この要領は、2022 年 1 月から施行する。

<学会事務局よりお知らせ>

1. 2022 年の会費をまだ納入されていない会員の方には振込用紙を同封しておりますので、お早目のお振込みをよろしくお願い申し上げます。未納年がある場合は複数年分の金額を記載しております。本会の会計年度は 1 月～12 月になります。
2. 今年 12 月で現役員の任期が終了します。

以下、幹事選挙施行規則に基づき、今秋に幹事選挙を行う予定です。ご承知おきください。

- ・選挙管理委員は、会長が以下の会員に委嘱いたしました。
落合世津子、池邊一典、高橋雄介
- ・選挙人および被選挙人は、投票年・投票月の 2 ヶ月前に会員である者に限り、名誉会員は、被選挙人になれません。
- ・選挙は、5 名連記の無記名の郵送投票とします。（投票用紙等は選挙人に後日（11 月ごろ）郵送予定です）
- ・選挙の日程等は、選挙管理委員会が会長の承諾を得て決定します。
- ・幹事の数 は 10 名とし、開票時に会長は別に若干名の幹事を推薦することができます



編集後記



酷暑の候、東京は梅雨が明け連日 37 度と厳しい夏となっております。皆さまはいかがお過ごしでしょうか。くれぐれも熱中症対策、そしてコロナ対策も忘れずにしていきたいものです。さて、第 72 号ニュースレターでは、昨年 12 月 21 日に逝去された布施晴美先生を偲んで特別追悼号として 4 名の先生方からお言葉を頂戴いたしました。そして、第 36 回学術講演会の案内の掲載、『双生児研究』(Japanese Journal of Twin Studies) 投稿規程も掲載しております。皆様の投稿をお待ちしております。また、7 月 23 日(土)には、学会「夏の研修会」も Zoom オンラインで開催されます。是非とも多くの会員の皆さまにご参加していただけますと幸いです。

これまでの会員のみなさまのご協力に感謝するとともに、今後ともどうぞ宜しく願い申し上げます。

編集委員：福島昌子（福井大学）・廣瀬英子（上智大学）